

## 【第 17 回アジア新体操選手権大会 2 日目】

5 月 24 日 個人予選・後半種目（クラブ・リボン）

【個人：喜田未来乃】

予選総合 7 位（3 種目合計得点：78.65）

《クラブ》得点：26.45（DB 8.00/DA 3.30/A 7.70/E 7.45）

後半種目、緊迫感のある中でも大きく崩れることなく、エネルギーを持って最後まで演技をつなげた。一つひとつの動きに力強さがあり、音楽と動きから作品の世界観が伝わる演技であった。一方で、冒頭のリスクでは投げがやや短くなり、空中下での回転が 2 回転となったほか、終盤は曲がギリギリとなる中で迷いが見られ、最後の DA を正確に実施できず、得点につながらなかった可能性がある。もう一步の部分においては、試合時のリズムコントロールや実施精度をさらに高めていきたいところである。

《リボン》得点：25.60（DB 7.20/DA 3.90/A 7.60/E 6.90）

冒頭の R をしっかりと決め、一つひとつの要素を丁寧につなげた。ラファエリターンでは踵が下がりノーカウントとなったほか、DA のかきが緩く、カウントにつながらなかった箇所も見られた。一方で、演技に入っている 4 つの R については、価値を最後までやり切ることができた。

リボンの緩みや身体難度の誤差が影響したのか、大きなミスはなかったものの、E 得点を 7 点台に乗せることはできなかった。

3 月末のソフィアワールドカップ以降、演技内容の見直しを重ね、精度の向上とともに演技全体の完成度は着実に高まってきている。D 得点をさらに伸ばしていくためにも、より説得力のある実施が今後の課題となる。

【個人：鈴木菜巴】

予選総合 11 位（3 種目合計得点：74.75）

《クラブ》得点：26.35（DB 8.00/DA 3.40/A 7.40/E 7.55）

いつも通りに「今やるべきこと」の準備を着実に、淡々と進めて本番に臨んだ。演技序盤は慎重な立ち上がりとなったものの、以降は徐々に本来のペースを掴むことができた。エカルテターンやフェッテピボットの終末など、加点を完全に取りきれなかった DB に課題は残したものの、現時点で発揮できる力は十分に尽くしたと言える内容であった。

《リボン》得点：23.95 (DB 6.20/DA 3.50/A7.30/E6.95)

最終種目として、最後まで高い集中力を維持してフロアに上がった。ジャンプ前に起きたリボンの絡みに対しても、焦ることなく極めて冷静に対応した。リスクにおいては、手具が前に投げられない状況の中で、即座に前転と後転を入れ、落下ミス回避した。DBに対してインクワイアリーを出したものの、得点の変更は認められなかった。

個人総合予選の2日間が終了し、日本の世界選手権個人出場枠2の獲得は叶わず、結果として1枠となった。鈴木選手は1種目目の大きなミス後も徐々に本来の動きを取り戻し、持ち味を発揮しながら巻き返しを見せた。しかし、その後の猛追をもってしても、初日の差を埋めるには至らなかった。それでも、明日の個人総合決勝はやってくる。どのような状況であっても、鈴木選手らしい演技を最後まで貫いてほしい。

個人 上位選手 (3種目の合計得点)

1位：IKROMOVA Takhmina (UZB) 84.75

2位：WANG Zilu (CHN) 81.30

3位：YERTAIKYZY Aibota (KAZ) 81.00

【団体：日本女子体育大学】

予選総合5位 (2種目合計得点：47.50)

《フープ3・クラブ2》得点：24.15 (DB/DA/A6.70/E6.)

出場選手：山岸聖菜、常住加留奈、中村林伽、東愛梨、熊坂華

フープ3・クラブ2は、昨日のボール5とは雰囲気を変え、「wings」の音楽に乗せてリズムカルに演技した。観客からの手拍子が選手たちの力となり、大きなミスなく最後まで踊り切ることができた。一方で、交換や連係での移動に加え、CRにおいてフープのくぐり抜けでの引っかかりや、手以外・視野外での受けにおいて加点要素が正確に実施されていない場面が見られるなど、全体的に精度に課題が残った。

ミスなくまとめられたことを自信に変え、明日の総合決勝では、それぞれの種目の世界観を表現しながら、最後まで集中力を切らさず演技をやり切りたい。

団体総合予選 上位国 (2種目の合計得点)

1位：CHN 51.05

2位：KAZ 49.95

3位：UZB 46.65

シニア個人は8演技の合計得点により、僅か2.45点差で5位という悔しい結果となり、世界選手シニア個人は8演技の合計得点により、僅か2.45点差で5位という悔しい結果となり、世界選手権大会の個人出場枠は1枠となった。日本として2枠獲得を目指して臨んだ今大会であったが、初日の大きなミスや、各種目における細かな価値の取りこぼし、実施精度の差が積み重なり、あと一步届かない結果となった。しかし、そのような厳しい状況の中でも、選手たちは最後まで気持ちを切らすことなく、一つひとつの演技に向き合い、諦めずに戦い抜いた。限られた1分30秒の中で、予定通りにいかない場面があっても、いかに演技の流れを切らず、作品の質や世界観を崩さずにつなげられるか一国際大会ではその対応力と安定性が改めて求められることを実感する大会となった。

世界選手権の出場枠獲得は、単なる順位だけではなく、日本の新体操の強化や国際舞台における存在感にもつながる大きな意味を持つ。今回の結果を真摯に受け止めるとともに、今後はD得点を確実に積み上げる構成力、細かな価値を取り切る実施精度、そしてどのような状況でも自分の演技を最後までまとめ切る力を、日本としてさらに強化していく必要がある。

4位には開催国キルギスが入り、地元開催という大きなプレッシャーの中で2名の個人選手が力を発揮し、出場枠を獲得した。うち1名はジュニアから上がった若手選手であったが、高い身体能力を生かしながら4種目を大きなミスなくまとめ、安定した実施につなげたことが印象的であった。開催国としての後押しがある中でも、自分の演技を崩さずやり切った対応力と安定感は、日本にとっても今後の強化に向けた一つの示唆となる結果であった。また、今大会を通して、キルギスに限らずアジア各国が競技力向上や強化に力を注いでいる変化も感じられた。身体能力の高さに加え、演技構成、実施精度、表現力など、それぞれの国が着実に力を伸ばしており、アジア全体のレベルアップが進んでいることを実感する大会でもあった。日本としても、国際舞台で安定して結果を残していくために、技術面・構成面・対応力を含めた総合的な強化がより一層求められる。

明日の総合決勝には、喜田選手、鈴木選手、団体が出場する。大会3日目となり疲労もある中で、個人は1日4種目、団体は2種目をこなす厳しい戦いとなるが、この2日間で得た課題と収穫を生かし、それぞれが最後まで自分らしい演技を発揮することに期待したい。